

両義性の「璧」——安部公房『密会』試論

河田 綾

1 「健康」体・安部公房

川本三郎は、「安部公房の「健康」¹」において、「湿った日本的なものとかわいた近代日本のモダンなものがごちゃまぜになった。日本病²とでもいう病気」から「完全にふつきれ」た作家として、「まさに安部公房は、「健康」そのものだ」と述べた。安部を「日本的なもの」から切り離して捉える評価は格別珍しくもないが、川本の評言がユニークであるのは、自らも「日本病」患者の位置に置きつつ、そうした人々と乖離した安部の創作に「健康」という形容を与えている点だ。ここには、「日本病」患者が「健康」体に対して向けるルサンチマンが込められている。とりわけ、この指摘が興味深いのは、社会と病院機構とをアレゴリカルに結びつけて、その「病」を描いた小説『密会』²の執筆時期にあたる点においてである。「日本病」を患う人々を尻目に、ひとり「健康」的に独自の創作を行う

作家。このような評価が与えられる中で、安部はどのように「病」を描いたのか。

『密会』執筆中、安部は³「こんどの作品で、ほくが引つかかったやつたのは、人称をどうするか、という問題だった。よくあるように、登場人物を三人称で書く、一見客観的な小説は書きたくなかったんだな。三人称で小説を書くということは、ヘタをすると作者が無傷ですんじやうという結果になりかねない。そこで『箱男』の場合は一人名で書いたんだが、こんどの『密会』では、小説の構造が、三人称でないと、とらえられない。一人名では登場人物を他者として存在させることがむずかしいんだな」と発言した。安部にとって一人名で小説を書くことは『砂の女』以降、ある種定型化していたが、このような選択をするのは「作者が無傷ですん」でしきり事態を避けるため、いわば、小説の中の言葉を作作者自身が引受けることによって作品の強度を保つという戒めが、創作に向ううえでの倫理的態度であったためである。その意味で、『密会』における一人名

と三人称とが混在する文体は、引用の後で言及する「現代の都市社会がいかにして弱者を内包していくか」という本作の「主題」と関わる。

弱者との関係について、また別の取材⁽⁴⁾でも、

民主主義の最終的イメージは、弱者の権利の極限的拡大になるね。その場合、弱者の拡大は、正比例して医者を再生産せざるを得ない。(中略) 医者は弱者の極限に対応する極限的な善であると同時に、例外者として患者を非人間的にあつかう特権を与えられるんだ。それが患者の願いなんだから仕方がない。健康への憧れが、同時にマゾヒスティックな悪魔崇拜を再生産していくという自己矛盾ね。これを窮極にまで広げたあるべき「理想社会」はひどくねじ曲げられた暗いものにならざるを得ないじゃないか。それが今度の小説のひとつのテーマだったんだ。(傍点ママ。以下同。引用者注)

とも述べている。ここでの「あるべき「理想社会」」は、患者(弱者)を「非人間的」に扱う医者(強者)を再生産することによって、「健康への憧れ」に基づく「マゾヒスティックな悪魔崇拜」を生み出す。「健康」を求めればこそ、患者は「非人間的」にならざるを得ない。「人間」として生かすことを「非人間的」に遂行する「理想社会」の姿が、『密会』で問題化した「テーマ」であった。その

意味で、本作のエピグラフに掲げられた「弱者への愛には、いつも殺意がこめられている」との警句には、弱者を「非人間」へと陥れる「理想社会」の姿がまざまざと刻印されている。

患者と医者が「非人間」的に依存し合うことをシステム化した「理想社会」。単行本『密会』の函には作者の言葉として、「地獄への旅行案内を書いてみた。(中略) 地上では愛と殺意という二本の枝に別れていたものが、地獄では一つの球根に融けあっていると、驚くことはないだろう。いま以上に迷ったりする気遣いはないのだから」と書かれてある。本論で考察するのは、「地獄」とでもいうべき「理想社会」に、如何なる形象が与えられているかということだ。ここで着目するのは、「地上では愛と殺意という二本の枝に別れていたものが、地獄では一つの球根に融けあっている」に表れる、対立する概念の融解というイメージである。本作では、弱者／強者、患者／医者、病氣／健康、異常／正常といった対となる論理を繰り返し強調する。こうした論理は、一人称と三人称とに分裂した記述によって、錯綜した「迷路」⁽⁵⁾としての作品世界を創出する。対となる事象を極限まで攪乱する「地獄」の「迷路」とは、いかなる表現によるのか。また、そこに描かれる弱者と、それを覆いつくす「理想社会」とは何なのか。

2 「裏返しの人」を聞く

まずは、「密会」のあらすじを確認する。本作は、ある夏の日の早朝、覚えのない通報によって妻を救急搬送された男（以下、「ぼく」）を視点人物として、搬送先の病院で妻を捜索する過程を描く三冊の（ノート）と〈付記〉という四つの手記によって構成される。「ぼく」は、妻を追って病院を訪れるが、行方は杳として知れず、その捜索の過程で当直医の自慰行為を覗き見たことをきっかけに病院内での様々な椿事に巻き込まれていく。頑迷なインポテンツに悩まされていたために他人の下半身を自らの下半身に装着して性的能力の回復を目論む副院長（以下、「馬」）、試験管ベビーとして生まれたために他者との「関係感覚」が欠落したとされる女秘書（以下、女秘書）、「溶骨症」という奇病に冒されながら「馬」の寵愛を受ける少女（以下、「娘」）、「娘」の父であり女秘書を強姦した過去を持つ警備主任（以下、「警備主任」）、言語心理研究所の職員で「馬」の妻でもある副院長夫人（以下、夫人）、これらの登場人物を中心に病院内で繰り広げられる「色欲地獄⁶」を描く。

作中の病院には無数の盗聴器が仕掛けられていて、それによって患者たちの行動は管理されている。病院内で妻の行方を探るうちに、「ぼく」は盗聴管理システムの存在を知り、「馬」から盗聴テープを手渡されて妻の行方を探る手助けを得る。しかし、テープには「ぼ

く」の行動を録音した音声記録されており、「馬」からはそれを基にして自身の行動をまとめる「報告書」の作成を命じられる。妻を探る手懸りを求めていた「ぼく」であるが、「報告書」を作成するうちに「娘」と出会い、女秘書の手引きによって殺された「警備主任」の後任となる。そのうち、「娘」の置かれた境遇に同情した「ぼく」は、彼女を誘拐する。妻を捜索しながら「娘」との逢瀬を交わす「ぼく」は、「馬」の眼を欺くために、「報告書」に虚偽の報告を書き連ねる。「ぼく」の企みを察知した「馬」は「報告書」の作成を命じつつ、「ぼく」の行動を監視・盗聴する。対する「ぼく」は、「馬」の眼をかくぐって「娘」との逃走を企てるも、その最中、病院で行われるオルガスム・コンクールの出演者に妻と思しき「仮面女」を発見する。しかし、妻である確証は得られず、その上、女秘書の手引きによって捕縛されてしまう。最終的に「ぼく」は「娘」と二人きり地下道に閉じ込められて、本作は幕を閉じる。

本論に入る。「馬」は、「ぼく」に「報告書」の作成を任ずるにあたって、「なるべく固有名詞は避け、ぼく自身についても、原則的に三人称を使用すること。つまり、ぼくのことを「彼」と書き、彼のことは「馬」と呼べ」と指示する。こうした要望に、「ぼく」は「馬以外の誰とも直接取引させまいという腹なのだろうか。何をびくついているのだろう」との疑義を投げかける。自らの行動を三人称に改めて書くことは、筆の運びを妨げるものでもあるが、同時に「一人称でははばかられるようなことでも、三人称でなら切り抜け

られそうな氣」を抱かせもする。また、〈ノートⅠ〉と〈ノートⅡ〉は、「馬」に宛てた「報告書」という体裁をとるために、「不必要なら後で削除してもらって構わない」との断りが入る。「ぼく」は「報告書」に記載した内容の取捨選択を「馬」に一任している。したがって、「報告書」は「馬」の意に沿う形で、自らの言動を「ぼく」自ら記録するという形式に基づく。その意味で、「報告書」の記述は「馬」の介入を促す形で構成されている。だから、「一人称を使うのが具合悪ければ、遠慮なく三人称に書きあらためてもらって構わない」。

しかし、〈ノートⅢ〉では、「この三冊目になって、ノートの意味も目的も、すっかり変ってしまった。これまでの二冊は馬の注文だったが、今度には依頼主がない。おかげで遠慮も気兼ねもいらなければ、自分を庇うために嘘をつく必要もなくなった。(中略)今度こそ真相をぶちまけてしまふ。前の二冊が調査報告なら、これから書くのは告発である。誰に読んでもらえるのか、今のところまだ当てはないが、とにかく泣き寝入りだけはしたくない」と、「報告書」から「告発」へとその果たす役割が変わる。ここで「ぼく」は、「自分を庇うために嘘をつ」いていたことを示唆し、〈ノートⅢ〉以降では真相の暴露に紙幅を費やすことを宣言する。誰に読まれる当てもない真相を暴露するのだ。しかし、この後には、「とりあえず、二冊目のノートに続く形で始めてみよう」との表明もあって、〈ノートⅢ〉でも「男」という呼称を用いた記述を継続するかのよ

うに書き始めてもいる。ただ、「男」という表記が見られるのは〈ノートⅢ〉の冒頭だけで、「馬」による回想が直接話法で記されて以降は、「ぼく」のまま記述が続く。このように錯綜する記述について、斉藤朋馨⁽⁷⁾は「この四篇の手記はそれぞれ〈読者〉の存在が想定されるながら記述された一群として成立して」いるが、「想定される〈読者〉の影は徐々に希薄になり、最終的にその姿は完全に消えてしまう」と指摘し、〈付記〉を「ぼく／男の区別や、語りの現在の情報」が記された括弧書きと報告部分という区別の消滅した、どの時点から記述された手記であるかも不明な文章——言うなれば、意図や目的を全く介さない純粹な物語」であると位置づけた。斉藤がいうところは「意図や目的を全く介さない純粹な物語」が意味するところは定かではないが、少なくとも〈付記〉に至るまでの〈ノート〉の果たす役割を考えるうえで、斉藤の論点を看過すべきではあるまい。以下、斉藤の指摘を参照しながら、〈ノート〉における記述がいかなる意図・目的に拠って、それがどのように変質していくかを確認する。

まず、「ぼく」の〈ノート〉執筆について考えるにあたり、「溶骨症」を患う「娘」との関係を踏まえる必要がある。「ぼく」は、「馬」の寵愛を受ける「娘」を誘拐するが、これによって「ぼく」と「馬」とは対立する。斉藤も指摘するように、「娘」の連れ出し犯の容疑者として「ぼく」を疑う「馬」は、「妻の搜索を援助するという名目でぼく自身の調査報告書を依頼し、その内容から少女の居場所を

探ろう」とし、また「馬」の意図を察知した「ぼく」は「男の調査報告書をいかにも依頼通りであるかのように作成しながら、少女の居場所を探られまいと周到にその意図を往な」している。〈ノートⅡ〉において、「ぼく」が「報告書」作成の意図を「ぼくを大人しく机に釘付けしておくのが狙いだったのかもしれない」と疑っていたように、「ぼく」の行動を物理的に制限することによって「娘」との密会を妨げようとする「馬」の目論見と、それを躲すように自らのアリバイ工作として〈ノート〉を利用する「ぼく」の思惑が交錯する。

「馬」と「ぼく」との思惑と利害が交錯する〈ノート〉を問うにあたり、「報告書」執筆の素材となる盗聴記録についても確認しておこう。「ぼく」は、盗聴記録から妻を探し当てようとするが、闇雲に行方を求めてもあらゆる音声は手懸りを暗示するばかりで確証も得られず、徒労感に苛まれる。

だが、そんなためらいにはお構いなしに、物音は次から次へと休みなく湧き出し、容赦なく男を翻弄しつづけた。次の瞬間へのかすかな期待が、そのたびに疑惑から目をつむらせ、男をソファに釘付けにしてしまうのだ。あらゆる物音、音声が、これ見よがしに手懸りをちらつかせているように思われる。手懸りに餓えているから、そんなふうに感じられるのか、それとも物音のなかには本来暗号が隠されているものなのか、その辺の

ことはよく分らない。それにしても、べらぼうな音の氾濫だった。追従、怒り、不満、嘲笑、ほのめかし、妬み、ののしり……そして、それらのすべてにちよっぴりずつしみ込んでいる猥褻さ。とくに囁き声というやつは、便器にまたがった下半身の形にそっくりだ。疚しさが好奇心のマスクをつけると、人間はめくれ反って、裏返しの人になる。急性盗聴中毒症。視覚を軸に構成されていた、外界との関係の崩壊が、高所恐怖症に似た眩暈をひきおこす。同時に存在しなくても、同時に体験することとは絶対に出来るはずのない、時間のモザイク。暗闇に似たところがある。

(引用における傍線は引用者による。以下同。≡引用者注)
盗聴記録に特徴的なのは、「べらぼうな音の氾濫」である。「ぼく」が感じる「急性盗聴中毒症」も、人間が「裏返しの人」として浮かびあがってくることから、「外界との関係の崩壊」による眩暈への拘泥を呼び起こす。こうした盗聴管理システムは、「音の氾濫」が常に何らかの手懸りを期待させるよう管理者を導くことで疑惑を増殖させる。それはいわば、「時間のモザイク」として構成された身体感覚に基づく管理体制である。管理者自身が「モザイク」として構成されることで、管理主体を統一的主体に還元させないばかりか、被管理者を「裏返しの人」として造型する。そこでの「裏返しの人」は、「外界との関係」が崩壊した「モザイク」状の「他

人」である。どれほど親しい間柄の人物も、いったん音声に置き換えられると、「めくれ反つ」た「裏返しの人」としか感受されない。これは、自分自身であっても例外ではない。その意味で、カセットテープの音声に基づいて描かれる〈ノートⅠ〉〈ノートⅡ〉の「男」とは、まさに「裏返しの人」としての「ぼく」である。「男」と「ぼく」とは、等価に結びつくものではない。⁽⁸⁾この点を踏まえれば、盗聴システムによって妻を捜索することが困難を極めることは論を俟たない。というか、音声によって構成される「裏返しの人」として妻を感受したところで、現実の妻には辿り着けない。女秘書との会話の最中、「妻の印象は、泡立てた卵の白身のように淡い」と記すのも、記憶の中の妻を音声に基づいて再編成することの困難を示している。

これらの考察を踏まえれば、「報告書」にあたる〈ノートⅠ〉と〈ノートⅡ〉における記述は、「馬」の眼を欺くために「ぼく」自身の「裏返しの人」である「男」の行動を記録した体裁であるとまとめられよう。こうした性質は、「告発」に当たる〈ノートⅢ〉において「男」の行動記録という様式を離れ、「ぼく」による真相暴露という性質を帯びる。しかし、先にも確認したが、〈ノートⅢ〉が「二冊目のノートに続く形で始め」られる点を加味すれば、「ぼく」が「告発」のために真相暴露に着手したと捉えることには慎重にならなければならない。たとえば、「娘」を連れ出して旧病院脇に身を潜める場面で「弁明ではなく、ぼく自身、こうして八号室の

娘と人目をしのびながら、しかも妻の行方を追っているという矛盾した行為に、じゅうぶん納得のいく説明をつけられずにいる。納得できないのは何もぼくだけではないはずだ」と記すように、自身の矛盾や虚偽を表明してもいる。とすれば、〈ノートⅢ〉の記述も、それまでの「報告書」と同様、虚偽を弄して「娘」との「密会」のアリバイ工作を行ったものと捉えることもできる。要するに、書いている「ぼく」と書かれている「男」を等価に結ぶことができない以上、「ぼく」の本当の行動は常に不可知なのだ。このように捉えてみると、〈ノートⅢ〉における記述は、少女との密会を隠蔽するという形式を保持しつつ、連れ出しの顛末、逃亡中の会話、隠れ場所（地下道）を克明に記すといった次第に、「説明」も「納得」もできない多くの矛盾を含んだ記述となっている。これに、〈付記〉が加わることによって、いよいよ書いている「ぼく」の姿は後景に退き、書かれている「ぼく」の行動描写に焦点化する。

以上のような記述の性質を踏まえれば、重要なのは、〈ノート〉の記述が「ぼく」の実際の行動と一致しているかどうかではなく、そうしたことが決定できない宙吊り状態のまま本文の記述が進行するということだ。したがって、次に問題となるのは目的や意図が決定不可能な記述がどのような作品世界を構築しているかということである。

小長谷卓史⁹⁾は『密会』における病院の構造について考察するうえで、院長の不在、または不可知に着目し、盗聴による管理システムが「不在の中心」・「中心の不在」によって成り立つことを指摘した。曰く、「不在の中心」或いは〈中心の不在〉は、「病院Ⅱ社会」に於いて人々を統御している構造の不透明性、そして誰からも可視的でなく不透明な権力（構造）の在り方を示す。こうした管理システムの中で、絶対的な権力者は存在せず、弱者（患者）／強者（医者）という区別も安定しない。だから、病院内の様々な椿事にあつた挙句に警備主任のポストを得る「ぼく」の立場も、「強者／弱者の区別で言えば（一応の）強者である」と指摘するように、「一応の」という留保を付ける形でしか表現できない。強者がいて初めて弱者が成立し、弱者がいて初めて強者が成立するように、両者はどちらか一方が存在しなければもう一方は存立し得ない。「馬」が「良き医者は良き患者」との「哲学」を語るのも、患者と医者が表裏の関係にあることを示す。

このことを踏まえ、続けて確認しなければならないのは、病院における盗聴管理システムがどのように形成されたかという点である。事の起こりは、「馬」のインポテンツの治療を目的とした「性の表象による興奮ならびに抑制」と名付けられた実験に発する。これは、

音声による刺激を介して性的興奮を喚起する構造の分析としてみた実験であったが、実験の最中、被験者の一人であった「試験管ベビー」で不感症の女性（のちの女秘書）が電気技師（のちの「警備主任」）に強姦される事件が起こる。この事件によって、実験は断念せざるを得ない状況に追い込まれるが、奇妙なことに彼女は、自らを犯した当人と組んでの実験の継続を申し出る。こうした事態に、実験の当事者でもあつた「馬」は「内心、腑に落ちない思い」を抱く。そこで、彼女の求めるものは何かを問うと、電気技師の盗聴技術にあるのではないかと思に至る。この「馬」の勘は見事的申し、「気付いた時には、盗聴の仕事が、実験そっちのけに独り歩きはじめ」、「そのまま成長し、自己増殖をつづけ、いつか事業として成り立つまでに組織化」してしまふ。

自らを強姦した相手と顔を合わせて実験に臨む苦痛に耐えてまで彼女を駆り立てたのは、盗聴にかかる技術の習得である。盗聴管理システムが「組織化」された結果、「彼女は馬の秘書になり、電気技師は警備主任におさま」ることとなる。この点を踏まえれば、病院内の盗聴管理システムは、「人間どうしの関係、感覚」が欠落した女秘書による、強姦事件への報復といった性質を帯びる。「馬」のインポテンツ、女秘書の不感症の治療及び解析という名目で進められたはずの実験は、「自己増殖」した後「組織化」され、一つの管理システムを構築した。インポテンツや不感症といった「人間関係神経症」からの報復として、患者の統制管理を実現したのである。

（ノートⅢ）で示されるが、「ぼく」が病院を訪れてから二日目の午後、女秘書は「警備主任」を殺害する。「警備主任」殺害の直接の要因は、「ぼく」を警備主任のポストにあてがうためである。「ぼく」に好意を寄せる女秘書からすれば、警備主任に任ずることで「ぼく」と懇意になることができるし、「馬」からすれば、病院の内情を知った部外者を取り込むことに繋がり、また「巨根」でならした「警備主任」のペニスを獲得させ、さらに溶骨症の娘と「ぼく」との密会を制限する口実にもなる。結果として、「ぼく」が警備主任のポストを得て、「病院中の権力を手中におさめるほんの一步手前のところまで来ているような気」を起こすまでに至る。こうした感覚を起こさせるのは、病院内の盗聴管理システムが「操作している者など誰もいないのに、存在しているというだけで畏怖され、服従心を引き起こす」点に見出し得る。管理者が誰であるか特定されずともシステムは自動的に駆動し、管理者が不在であったとしてもシステムに何ら影響を及ぼさない。むしろ、管理者の不在が被管理者たちを相互不信に陥らせ、被管理者たちは秩序を内面化する¹⁰。

盗聴管理システムの敷かれた病院内部において、実働部隊として働くのがトレパン姿の入院患者たちである。彼らは、女秘書の管理下にあるため、彼女の指令に従って行動を起こす。たとえば、（ノートⅡ）で「ぼく」は、白衣姿の中年男が坊主頭のトレパン二人組に暴行を受けている場面を目の当たりにする。この場面では、なぜ白衣姿の男が暴行を受けているか定かではないが、暴行が女秘書の指

示によって行われていて、他の入院患者たちがそうした事態に干渉できないことを「ぼく」に知らせる。

蒸しパンが彼女を認めた。耳のうしろに立てた掌を、象の耳のようにひらひらさせた。義眼がきれいにそろった白い歯を見せ、微笑んだ。どちらにともなく、彼女が声をかけた。

「九九を言ってみてごらん」

蒸しパンが得意そうに唇をすぼめ、頬を指ではじいた。瓶の口を叩いたような音がした。節をつけて朗唱しはじめた。

二二が四、二三が六、二四が八、二五の十、二六の十二……見物人は目をそらせ、ぎこちなく体をこわばらせた。誰もが不機嫌なふくれっ面をしていた。その非難が彼女に向けられたものか、二人組に向けられたものか、それとも犠牲者に向けられたものかははっきりしない。その間義眼の坊主頭は、疑わしげに、見えるほうの片眼をじっと男に据えていた。むりに人前で排便を強要されているような気まずさだった。

中野和典¹¹は、引用の場面をトレパン姿の男たちの「精神病患者としての側面が露わになる」場面と捉え、患者から医師へと向けられる暴力が「院内秩序の破綻」を意味すると述べた。そして、これを目の当たりにする見物人たちの困惑は、「この破綻をもたらした張本人が、号令をかけた女秘書なのか、その号令に喜々として従う警

備員兼患者の二人組なのか、そのような二人組から制裁を受けていた〈白衣の中年男〉なのかを特定できない」ことから生ずると指摘した。中野の指摘は、「九九」の朗唱と院内秩序とを結び付けて考察した点において重要であるが、本作における院内秩序が女秘書に由来することを踏まえれば、この「九九」の朗唱こそが院内秩序そのものを寓意すると捉えるべきであろう。注目するのは、ここで唱えられる「九九」において、一の段が省略されていることだ。先にも確認した通り、本作の病院では、院長という単一の権力（中心）が不在である。「九九」が「二二が四」から始められるのも、〈一〉に還元される権力構造を不在・不可視とすることで、乗法的に増殖する盗聴管理システムを寓意する。その意味で見物人たちの「不機嫌なふくれっ面」は、自分たちが盗聴管理システムの中にあることをまざまざと見せつけられることに対する困惑であり、そうしたシステムから誰も逃れる術を持たないことに対する恐れであるはずだ。義眼の坊主頭が「ぼく」に睨みを利かせるのも、この病院内の秩序が如何にして成立しているかを牽制するものと理解できる。

これらを踏まえた上で、病院内における「ぼく」の位置づけについて改めて確認しておこう。既に述べたが、「ぼく」が警備主任のポストを得るのは、女秘書の働きかけによるところが大きい。女秘書が「ぼく」に過剰な関心を示すのは、「相手が手淫する姿を想像しても嫌悪感を感じない場合は、心身ともに理想的な結合が期待される」という「相性テスト」の項目に適合したことによる。このこ

とからすれば、不感症を患う女秘書にとつて「ぼく」の出現は、自らの症状回復または改善の好機であったといえる。なるほど、「ぼく」の自己認識において繰り返されるのは、「健康」に対する過剰なまでの自信であった。「その医者に人を威圧するものがあつた」とは認めるが、ぼくだって体力には自信がある」、「馬はこのところ、ひどく神経質になつている（中略）第一、ぼくが健康的すぎることに、彼には立場上やりきれないらしい」、「あいにく夫婦そろつて、底抜けの健康体なんだ。病院との接触なんてあるわけがないよ」。

「ぼく」の鍛えられた肉体は、「適度に身軽で機敏な攻撃性」を表し、ヌード・モデルをしていた過去も相俟つて、ある種のセックス・アピールとなつている。併せて、思い起こしておきたいのは、「馬」は「痩せて背も低く」、「人間関係神経症」を患つてインポテンツに陥つた人物として描かれている点だ。このことを「馬」が副院長というポストにあることから鑑みれば、「健康的すぎる」と自負する「ぼく」は病院内における「良き医者は良き患者」という「馬」の「哲学」に適合しない存在だといえる。つまり、「馬」にとつて「ぼく」は羨望の対象であると同時に、自らの「哲学」にそぐわない人物なのだ。

では、同じく「健康体」であるにもかかわらず、病院内に取り込まれることとなつた「ぼく」の妻はどのように捉えられるか。もともと「健康」であつたはずの妻は、病院に搬送された際、転倒して軽い脳震盪を起こし、再び気を取り戻した瞬間、周囲を白覆面姿の

医者たちに囲まれていたことで「輪姦されると早とちりしてしま
い、途端に「強姦の恐怖から逃れるための、防衛的発情」として「被
姦妄想」に囚われる。こうして妻は、病院のシステムに取り込まれ
る。このように、本来「健康」であった者が患者へと変質すること
は、近代医療が「健康体」を病院内部に招き入れることによって「病
を生産したことの隠喩と捉えられる。何ととっても、病院とは「病
を生産するシステムであるのだから」⁽¹²⁾。その意味では、「馬」が「ぼ
く」に「報告書」を書かせ、女秘書が警備主任の任を与えたのも、
「ぼく」を病院における医者／患者の機構に組み込もうとする策略
という意味合いを帯びるようになる。

ここまで確認してきた病院における盗聴管理システムと「ぼく」
との関係をまとめておこう。盗聴管理システムは、女秘書の「九九」
に表れるように、乗法的に「自己増殖」することで「組織化」され
るところに、その特徴を見出すことができる。つまり、〈一〉が不
在、または不可知であることに伴って、対となる概念や論理が支配
する空間である。弱者／強者、患者／医者、病氣／健康、異常／正
常……あらゆる二項は、その振幅の中で、交錯し、溶解し、混線す
る。対となる概念は、境界を設定することによって一方の存立基盤
を画定し、他方をその外部へと押しやる。しかし、本作における対
概念は互いが互いを侵犯し合うことによって、その境界を絶えず攪
乱する。したがって、最終場面において「ぼく」が「自分が病気で
あることを認め、申し分のない患者になることを、あらん限りの声

で訴えつづけ」るのも、「健康体」であることからの脱落の表明で
あり、対となる論理へ回収されることを希求したものと捉えられる。
小長谷は当該箇所を、「強者／弱者の混融」という「病院Ⅱ社会」
の「内的法則」に抗い続けてきた「ぼく」が「病院Ⅱ社会」のシス
テムに主体的に取り入ろうとする記述と捉え、本文の末尾に「明日
の新聞に先を越され、ぼくは明日という過去の中で、何度も確実に
死につづける」とあることと接続して、「世界を意味付けている線
的な時間軸の外に放り出されたのであり、「病院Ⅱ社会」の世界か
ら決定的に疎外された」と指摘した。この指摘に明らかであるよう
に、「健康」であることは、同時に「病氣」を導き出すことによっ
て対の論理に回収される。その意味で、「ぼく」は、病院内部にお
ける対の論理に取り込まれつつある人物として造型されている。し
かし、この結末部にあつて、「世界を意味付けている線的な時間軸
の外」へと「疎外」された「ぼく」のいる時空間とはいかなるもの
であるのだろうか。

4 両義性の「鏡」

病院内部における対の論理を象徴的に表すアイテムとして、作中
たびたび言及される「嘘発見器」がある。「嘘発見器」は、「馬」の
夫人が言語心理研究所職員でいたために、二人の結婚生活で日常的
に用いられた。二人が結婚生活の会話を「嘘発見器」で検査する生

活を送ったのは、互いの「素朴な愛の確信」に基づいて行われたのだが、結果として二人の間の緊張感が薄れ、「馬」はインポテンツに陥った。

夫人は「嘘発見器」について、次のようにいう。「嘘発見器って、冷凍作用があるんじゃないかな。真実が表なら、嘘は裏。ものごとをすべて、裏と表の関係だけで割切ってしまうでしょう」、「コンピュータも、すべてを二進法で考えるわね。イエスカノー。感情と理性の間に矛盾がなければ、それでもいいかもしれない。でも、人間からその矛盾を取り除いてしまったら、どうなると思う。事実だけが残って、嘘も本当もなくなってしまうたら……。」。夫人の言に則れば、「嘘発見器」の論理とは「ものごとをすべて、裏と表の関係だけで割切」る「二進法」の論理である。⁽¹³⁾嘘か本当かという二分法を積み重ねる「二進法」によって、「事実」を導き出す。その意味で、「イエス」「ノー」に基づく質問を積み重ねていく「二進法」が「事実」を浮かびあがらせるという論理によって「馬」はインポテンツへと陥った。ここに、「人間関係中枢」が機能不全を起こす要因がある。また、「人間関係中枢」は、他者との交渉が「儀式化」されることによって機能低下を起すことが夫人の台詞によって明らかにされてもいる。つまり、「馬」の思う「人間関係神経症」とは、「二進法」によって「事実」を導き出し、矛盾や嘘を排除する論理によって「儀式化」されたコミュニケーションを生み、それに伴って「人間関係中枢」が機能不全を起こした状態を指す。

「ぼく」が夫人による「嘘発見器」のテストを受けた際、そこで夫人は「私と寝たいと思いますか」との問いを投げかける。「ぼく」は、初め不意を突かれて答えられずにいるが、そのような戸惑いは、嘘として診断される。しかし、気を取り直してもう一度同じ質問を投げかけられた時には、「はい」と答えたことが、本当と診断される。このやり取りに続く次の場面は、嘘と本当の二分法に収まらないコミュニケーションのあり様を描出している。

「そろそろ最後の質問にしませんか。」

しかし彼女は質問のかわりに、機械のスイッチを切り、ぼくの体から電極を取り外しはじめた。

「どうせ最初から、答えるつもりなんか無かったんでしょ。」

喉を詰め、遠くにいる誰かに話しかけているような感じだった。盗聴器を意識しているのかもしれないとも思った。べつにぼくのために質問を打ち切ってくれたわけではなく、副院長に対する意思表示だったとすれば、馬になってインポテンツから恢復した以上、まず自分のところに戻って来るべきだと訴えたかったのかもしれない。たしかに馬が代理ペニスを使って交際する場面を想像すると、他のどんな組み合わせよりも、この二人の場合が淫らに感じられた。そしてなぜか、この場合に限って、ぼくは淫らという言葉を、芳醇だとか成熟だとかいった、肯定的な意味で使っていたようである。

「まだ私と寝てみたい」

なぜか答えられなくなっていた。

引用のやり取りは、「ぼく」に向けられた質問であるようで、その実、盗聴器の先にいる「馬」へと向けられた質問であることが示唆される。そのようなやり取りに「ぼく」は、言外の意を汲み取って「淫ら」な印象を受ける。そして、その言葉を「芳醇だとか成熟だとかいった、肯定的な意味」へと置き換えていく。ここで「ぼく」が夫人の本心を正確に捉えたか否かは定かではないが、重要なのは、発せられた言葉の背後に夫人の「意思表示」を汲み取ろうとする態度である。「馬」は、「あいにく交接は、生殖器でするものじゃない、人間関係中枢でするものなんだ」と述べていたが、「人間関係中枢」が導く交接は、「二進法」で割り切れない言葉の連想から「淫ら」さを感じることで達成する。「私と寝たいと思いますか」との問いかけに「イエス」「ノー」で答えないこと。言葉の先に、言外の意を汲み取って「肯定的な意味」に置き換えていくこと。このようなり取りの内に、「人間関係中枢」は駆動する。「馬」が交接を「人間関係中枢でするもの」と理解しながらも、しかし、インポテンツを解消できないのは、患者と医者との二分法を抜け出ることができないことに由来するといえる。

さて、「馬」と「ぼく」とは対立関係にあるが、そのうえで看過してはならないのは、両者が互いに書く主体でもあり書かれる客体

でもあるということだ。「ぼく」の場合には、「馬」の指示によって自らの過去の行動を「報告」する形式で記した〈ノートⅠ〉〈ノートⅡ〉、「報告書」の体裁を踏襲しつつ、実際には病院内部の椿事を「告発」する内容を記した〈ノートⅢ〉、そして「報告」でも「告発」でもない宙吊りの記述〈付記〉、これらはいずれも「ぼく」が「ぼく」自身のことを書くという形式に、一応は基づいている。対して、「馬」の場合には、〈付記〉に登場する「明日の新聞」の執筆者として、その名が署名されている。この「明日の新聞」は、未来を過去として記述することによって、過去→現在→未来といった時間軸を反転させる時間認識をもたらす。確定した未来に向って、現在を過去として編成すること。未来を過去形で記すことによって、書く「馬」は書かれた自己を追走する。ここには、過去の行動を偽装することで現在の自己を隠蔽していた「ぼく」の〈ノート〉と正反対の時間認識が露呈している。つまり、「ぼく」が過去と現在の自己とを同じものと見做すことを逆手にとって〈ノート〉の偽装を行ったのに対し、「馬」は未来を画定することで現在の自己を編成するのだ。

このような両者の対立関係について考えていくにあたって、「馬」が「蜘蛛が糸をつむぎ出すような早口で喋」る、医者と患者の関係は重要である。長くなるが、引用する。

「必要なのは怪我人の痛みに同情することではなく、止血し、

消毒し、傷口を閉じること。怪我人を怪我した人間としてでなく人間の怪我として扱うことなんだな。その関係に馴れた医者
は、人間面した患者を見ると、むしろに腹が立つものさ。腹を立てられまいとして患者は、人間であることをやめようとする。医者はますます孤独になり、苛立ち、さらに人間から遠ざかることになる。患者に対する偏見が、名医の条件だといつても言いすぎではないだろう。しかしこの医者の孤独こそ、もつとも人間的なものだという逆説も成立つんじゃないかな。人間だけが、適者生存の原則にそむいて、弱者や病人を抱え込み、その生存権を保証してしまったわけだ。英雄は亡びても、弱者は生きのびるといふわけさ。事実、文明の尺度は、その社会が含む不適格者のパーセンテージで計れるからね。現代を（患者の、患者による、患者のための時代）と規定した政治学者（氏名不詳）さえいるらしいよ。だから病める時代などと愚痴はこぼさないこと。医者の孤独はいわば患者の権利なんだな。それでもなお医者が孤独から逃れようと思うなら、仕方がない、自分も同時に患者になって、二重の資格を取得するしかないだろう。私はずっと、そういう心構えでやって来たつもりさ。だから、インポテンツだって、本気でよくよした事なんか無かった。嘘じゃない。インポテンツでさえ、それだけ患者に近づいたしるしだと思えば、むしろ慰めになったくらいさ。」

患者と医者の関係は不即不離であって、両者は、相手の「人間」性を抹消することによって互いの役割（職分）を全うする。「馬」が思う「人間関係神経症」が医者であることの孤独のうちに発症するならば、「馬」の病は患者になりきれないことのうちに存するといえる。それはいわば、「怪我人を怪我した人間としてでなく人間の怪我として扱う」との発言に表われるように、「人間」と「怪我」との関係を転倒する論理を獲得できないことに根拠づけられる。このような発言をする「馬」に向って「ほく」は、「いい加減だよ。いつだったかも、言っていたじゃないか、患者も年季が入れば入るほど、それだけ性欲亢進の傾向が見られるって」と反論する。これに続けて「馬」はいう。

「だから今、それを言いかけていたんじゃないか。たしかに盗聴例が増えるにつれて、事実としても認めざるを得なくなってきた。本物の患者には、インポテンツなんて無いらしい。病気の内にも入らないらしいんだな。でも、なぜだろう。もしかすると患者社会の構造と関係があるのかもしれない。刑務所や兵舎では、あけすけな猿談が交流の鍵になる。商談の裏取引には、しばしば性の供応が効果をあげる。倦怠期の夫婦が、寝室を有料化して危機を切り抜けた例もある。すべて性を利用した、人間関係の再編成だね。むろん患者社会は、刑務所や兵舎とは違うよ。人目をしのぶ必要もなければ、人間関係崩壊の危機にさ

らされているわけでもない。しかしその構造の何処かに、人間関係中枢の負担を軽くする秘密が隠されているに違いないのだ。患者とは何か。いったい何が患者の本質なのだろう。それから、ふと気付いたのさ。少くもあの娘は自分のインポテンツを忘れさせてくれる。医者という檻の扉を開けて、患者の領分に誘ってくれる。きつと完全患者の魂を持ち合わせているからに違いない。私に分配できるほど密度の濃い魂なんだ。なんとか彼女の心を理解してやろう。せめて彼女の魂に似せるよう努力してみよう……」

「あいにく似ている所なんて、これっぽっちも無さそうだけだな。」

「理想の患者……患者の中の患者……永久に癒されぬ者……死と添い寝する日々……宿主よりも大きくなった寄生木……不具の化身……怪物……そして、〈馬人間〉……」

「医者の孤独こそ、もっとも人間的なものだという逆説」を看取する「馬」は、医者の孤独が「人間」であることを補強する逆説の論理に絡め取られている。だから、いっそ自らを「怪物」へと位置づけることによって、「完全患者の魂」を持つ「溶骨症」の「娘」と対等になることを希求する。そうして、「人間関係中枢」を麻痺させることが患者と医者の関係の対称性を担保すると理解する。だが、こうした「馬」の論理には、「なんとか彼女の心を理解してや

ろう。せめて彼女の魂に似せるよう努力してみよう」といった、「心」や「魂」を持つ相手として「娘」を想定する情念が差し挟まれてもいる。つまるところ、「馬」は「怪物」たろうと努めている時点で、未だ「怪物」ではないという事態を露わにしている。だから、「娘」を「理想の患者」「患者の中の患者」「永久に癒されぬ者」と位置づけるのも、「人間」としての医者のパターンリズムを抜け出していない。「完全患者の魂」と向き合うためには、「怪物」としての完全患者の魂をもつてするしかない。それはいわば、患者を非「人間」化することによって、医者自らも非「人間」化することである。

しかし、ここでの「人間」と「怪物」とを対比的に図式化しては、その議論自体が「怪物」を一面的にしか捉えていないものとなってしまふ。たとえば、ミシユル・フーコーは、十九世紀における「異常性」の問題を「怪物的人間」・「矯正すべき人物」・「自慰する子供」という三つの類型から考察した⁽¹⁴⁾。ここでは、「怪物的人間」という形象に関する指摘を参考にする。

まず、フーコーは「怪物」という概念は、本質的に、法的な概念⁽¹⁵⁾であることを確認する。それは、「怪物」が「法律に対する侵害であるばかりでなく、自然の掟に対する侵害でもあるという、そうした事実にもとづいて規定されるから」であるが、同時に「怪物」は「境界であり、法がそこにおいて反転する地点であると同時に、まさしく極限的な場合にのみ生じる例外でもある」という。「怪物」は、それ自体「法に反するもの」であり、「最大限にまで高められ

た違反」であるのだが、しかし「怪物」が「怪物」たるのは「法を侵害しながらも法に口を差し挟ませない」力の内にある。すなわち、「怪物は、逆説的にも——その限界としての位置にもかかわらず、また、不可能なものであると同時に禁じられたものであるにもかかわらず——理解可能性の原理とな」る。したがって、「怪物とは、同語反復的な理解可能性であり、自分自身にしか送り返されることのない説明原理」なのだ。こうした指摘に依れば、「怪物」を「人間」に對置させることは、「怪物」の「同語反復的な理解可能性であり、自分自身にしか送り返されることのない説明原理」という性質を読み落としてしまいかねない。「怪物」とは、境界でありながら、しかしそれ自体がすでに「理解可能性の原理」なのである。「怪物」は、それに対置される概念（「人間」）を創出するのみならず、「怪物」とは「怪物」である、という「同語反復」のうちに構成され得る。その意味で「怪物」とは、自己完結する（一）の「原理」としての側面を有する。

こうした点を踏まえると、「完全患者の魂」を持つとされる「溶骨症」の「娘」は、對の論理の振幅のうちに位置づけられることがない「怪物」である。彼女は「永久に癒されぬ者」である故に、「理想の患者」、「患者の中の患者」なのであって、「良き患者は良き患者」という両義性を持ち得ない。というより、両義性を持ち得ないからこそ、「馬」や「ぼく」の保護欲求を唆した。彼女は、その徹底性において、患者／医者、病氣／健康という對の論理の振幅に位

置づけられない例外なのだ。こうして「娘」は、對の論理の振幅のうちに回収されない（二）を体現する。

疲れると電池を抜いて、こっそり娘を抱きしめた。時にはぼく自身も勃起することがあった。娘の髪はますます深くなり、人間の形から遠ざかっていくようだった。

ついに懐中電燈の電池が切れた。ぼくは盗聴器に向って、恥も外聞もなくわめき始めていた。呼び掛ける相手は馬だった。自分が病氣であることをみとめ、申し分のない患者になることを、あらん限りの声で訴えつづけた。

もう時計も見えないので、何日だったのかもよく分らない。食料も底をつき、飲み水もなくなつた。それでも疲れると、電池を抜いては娘を抱きしめた。娘はめつたに反応を示さなくなつた。いずれは盗聴器の電池も切れ、ぼくは誰にも氣兼ねなしに娘を抱きつづけることになるのだらう。

ぼくは娘の母親でこさえたふとんを齧り、コンクリートの壁から滲みだした水滴を舐め、もう誰からも咎められなくなつたこの一人だけの密会にしがみつく。いくら認めないつもりでも、明日の新聞に先を越され、ぼくは明日という過去の中で、何度も確実に死につづける。やさしい一人だけの密会を抱きしめて

……

(引用における空行は本文ママ＝引用者注)

結末部において、「ぼく」が「あらん限りの声で訴えつづけ」るのは、患者の領分に属することによって病院における弱者／強者の対の論理に取り込まれることへの希求である。病院という空間において、この論理を逃れる術はない。したがって、「病気であることを見とめ」ることは、自らを患者に位置づけることによって弱者／強者という対の論理を補強する。しかし、ここでの「ぼく」の咆哮が「馬」の耳へと届くことはあるまい。また、「自分が病気であることを見とめ、申し分のない患者になることを、あらん限りの声で訴えつづけ」ることが、患者の資格を得ることになるだろうかとの疑念も湧く。自ら患者だといえばそれで患者になるはずもない。こうした疑義を差し挟まざるを得ないのは、「あらん限りの声で訴えつづけ」る「ぼく」の姿が、かえって「健康」を裏付ける証左となっているからである。「自分が病気である」と、「あらん限りの声で訴え」る「健康体」という逆説が出来しているともいえる。すると、ここにおいて「ぼく」は、弱者／強者、病気／健康といった対の論理に取り入ろうとしながら、しかし対立軸のどこにも位置づけることが困難なところにいることになる。

病院の論理から弧絶した「ぼく」は、「誰からも咎められなくなつたこの一人だけの密会にしがみつくとしかできない。密会の相手は、つまるところ「ぼく」だ。ここにおいて、「ぼく」と「男」

とに分裂していた二極間運動は闕に達する。もはや、「ぼく」が「ぼく」であることを示す手立てはなく、書かれる「男」との一致も見込めない。そしてまた、ここでの死は一回性の出来事ではない。死は一つの極限であり、生の対立概念でもあるが、「死につづける」ことは、そうした対立構造が闕に達した状況を表す。生きながら死ぬ、死にながら生きる、こうした両義性の闕に現れるのが「死につづける」ことである。ここでは、生か死かを分別する境界は失効している。それはまるで、「人間」としての外形を保てない「娘」の「髻」のように、生と死のどちらでもあり、どちらでもない事態を示す。生と死の境界は失効し、生と死とは一つの連続体を形成しながら、しかし、一致することなく折り畳まれる。あるいはまた、「明日」と「過去」という表現にも注目すれば、ここでの時間感覚も「明日」と「過去」とが共存する形で折り畳まれた時間概念を創出している。「明日」でも「過去」でもある時に堕ち込んだ「ぼく」がいるのは、まさに時間の「髻」である。結末では、「ぼく」と「男」、生と死、弱者と強者、「明日」と「過去」、あらゆる二項が境界を失い、そのどちらでもありながら、どちらでもない「髻」を描出している。

5 「死につづける」ことの「愛」と「希望」

『密会』の結末部について、安部は「死ぬ」ではなくて「死に

つづける。なんだ。もし人間に愛とか希望が生まれてくるとしたら、死ぬことではなくて、死につづけることのなかからではないかと思う」と語った。⁽¹⁵⁾この言及から、『密会』において描かれた「死につづける」と、安部のいう「愛」と「希望」とを接続して考察し、まとめとする。

先にも確認したとおり、『密会』の結末部は、病院内における対論的構造を「襞」に象徴される立体的な構造へと転換する点で、線条的な論理には回収されない新たな認識を浮上させる。⁽¹⁶⁾そうした認識が「死につづける」という言葉に集約する。このことを踏まえ、安部の述べる「愛」や「希望」について考えるにあたり、ジル・ドゥルーズがフーコーの諸著作から導出した「襞」の概念を援用したい。⁽¹⁷⁾フーコーは、「自己」を「自己と自己との関係」から捉えるにあたり、古代ギリシヤ人を参照項として、「ギリシヤ人の新しさは、後に、ある二重の「離脱」にむけて現われる。それは、「自分自身を治めることを可能にする訓練」が、力関係としての権力からも、地層化された形態や徳の「コード」としての知からも離脱するとき「現われる」という。すなわち、他者に向けて権力を行使するには、まず自分自身に向けて権力を行使することによって「エンクラティア」(克己)されなければならぬ(「もし、人が自身を統治しないとすれば、どうして他人たちを統治することを望めるだろう」)。「他人を支配することは、自己を支配することによって、二重化されなければならぬ」⁽¹⁸⁾、他人との関係によって二重化されなければならぬ

ず、「権力の強制的な規則は、権力を行使する自由人の随意的な規則によって二重化されなければならない」。ドゥルーズは、このような力の「二重化」した状態を、「彼らは力を、力として保存しながら、折り畳んだのだ。彼らは力を自己にひきもどす。彼らは、内面性や個人性や主体性について無知であったのではなく、一つの派生物として、ある「主体化」の産物として主体を発明したのだ」としたうえで、このような「主体化」の産物としての主体の姿に「フーコーの根本思想」を読み取る。

ドゥルーズがフーコーを通じて導き出す「襞」としての「主体」においては、外部にあつたはずのものが内部へと折り畳まれ、内外という区別が消失する。また、「主体化」の産物としての主体」という言葉にあるように、「主体」は「主体化」のプロセスの中で生成変化する。したがって、ここでの「自己」も、力の加わり方によって折り目を変える「襞」さながら、外との関係によって流動的に変化する。「それは松果腺に似て、たえず方向を変えながらみずからを再構成し、内に属するけれども、あらゆる外の線と共通な広がりをもつ一つの空間を描き出す」。

ドゥルーズの指摘した「襞」を、本作の読解に結びつければ、結末部における「ぼく」がたどり着く時空間は、極めて可塑的な地平にありながら、自己を絶えず再構成させる「主体」のあり方を示す場である。⁽¹⁸⁾それは、弱者／強者に代表される病院内のステイックな対立図式を乗り越えようとする「主体」の可能性である。しかし、

きるのではないだろうか。

こうした「主体」の可能性を、一般的な意味での愛や希望に結びつけることには慎重になるべきだ。何ととっても、「弱者への愛には、いつも殺意がこめられている」のだから、『密会』において問題化されるのは、弱者への「愛」を「殺意」の裏返しとして認識したうえで、何度でも「死につづける」ことである。それはいわば、絶えず「殺意」の矛先を自らへと向け直すことで成就する。強者を駆逐するでもなく、弱者に阿るでもなく、ひたすらに「殺意」を自らの喉下突きつける形でしか、「愛」も「希望」も表出しない。『密会』の読解を通じて導き出されるのは、外へ向けられた「殺意」を内へ向け直す「襲」の倫理である。¹⁹たとえ、その光景が「地獄」にしか見えなくとも、「死につづける」ことでしか、弱者を描く術はない。『密会』において導き出される弱者への「愛」や「希望」は、自己の内にその力を差し向けることによって外部へと生成されるものである。だから、安部の想定する「理想社会」とは、「襲」の倫理をもって自己の内に力を差し向けることでしか、外の世界と連絡する通路を見出すことができない関係性に基づく社会だといえる。このような社会への対峙の仕方は、一見すると、自己の内に閉じこもって他者との連絡を絶っているかのようにも見える。そうした安部の創作に対する向き合い方を「健康」と揶揄する者もいた。しかし、『密会』の読解から導き出されるのは、自己の内に向っていくことによって他者と連絡する可能性を問うことであった。ここに、安部の小説作品における弱者を描くことに対する倫理を見出すことがで

注

- (1) 川本三郎「安部公房の「健康」」(『ユリイカ』一九七六年三月)
- (2) 『密会』(新潮社、一九七七年二月)は、『箱男』に次ぐ「純文学書下ろし特別作品」として発行された。装画は安部真知。単行本の函には、安部本人による自作評と、ドナルド・キーン、大江健三郎、倉橋由美子が帯文を寄せている。なお、本文の引用には、『安部公房全集』第二六卷(新潮社、一九九九年二月)を用いた。
- (3) 「書き下ろし小説『密会』を執筆中」『東京新聞』の談話記事(『東京新聞』、一九七七年一月三十一日)
- (4) 「裏からみたユートピア」(『波』一九七七年二月)
- (5) 注(2)、倉橋由美子の評に基づく。倉橋は、本作を「主人公とともにこのカフカ風の入口をくぐると、そこには超現代的な病院、独自の安部公房氏の空間が広がってゐて、砂のやうに克明な文体で作られた迷路が続いている。ここにはもはや時間がない」と評した。
- (6) 平岡篤頼「解説」(安部公房『密会』新潮文庫、一九八三年五月)
- (7) 斉藤朋啓「安部公房『密会』論―時空の変形とアンチ・アレゴリー」(『國學院大學大学院紀要―文学研究科』二〇一四年三月)
- (8) クリストファー・ポルトンは、「歌い合う機械たち―安部

公房とサイエンス・フィクション」(内藤由直・友田義行訳、『文学』二〇〇七年七月)で、安部作品における「アイデンティティ」の「混濁」について指摘し、それを『密会』にも読み取っている。「語り手は、「舌打ち、咳ばらい、調子つ外れの鼻唄、咀嚼音、懇願、心にもない追従笑い、げっぶ、鼻水の音、おずおずとした申し開き……そんな断片に寸断され、陳列されている見世物男。」と、脱構築され断片化された自分の姿を見る」。本論における「裏返しの他人」に対する指摘は、右の指摘に示唆を受けている。

(9) 小長谷卓史「安部公房『密会』論」(『日本文学論叢』二〇〇一年三月)

(10) 小長谷は前掲論文において、こうした病院の盗聴管理システムに、ジェレミー・ベンサムが考案し、ミシェル・フーコーが『監獄の誕生——監視と処罰』(田村俶訳、新潮社、一九七七年九月)で分析した「パノプティコン」(一望監視装置)との構造的類似を指摘している。

(11) 中野和典「狂気の躍動——安部公房『密会』」(『敍説Ⅲ』二〇〇一年九月)

(12) たとえば、イヴァン・イリツチは、『脱病院化社会』(金子嗣郎訳、晶文社、一九七九年一月)の中で「医原病」を、「臨床的医原病」・「社会的医原病」・「文化的医原病」に分けて、医療機関が人々の「健康」に介入することに警鐘を鳴らした。「人間によって意識的に生きられている脆弱さ、個性、関連性は、痛み、病气、死の経験を人生の不可欠の部分にする。この三者と自律的に闘う能力は、彼の健康に対して基本的なものである。彼が自分の内奥のものを管理にまかせるとき、彼は自律性を手

放し、彼の健康は衰えざるをえない。現代医学の真の奇跡は悪魔的である。それは単に個人だけでなく、すべての人を、個人的健康の非人間的なまでに低いレベルで生かしておくということである。医療のネメシスは、各人が自律性の中で闘い、それを破壊することで、終息する機会を、改善し平等化するために発足した、社会組織の負のフィード・バックなのである」。

(13) 「嘘発見器」の分析については、平伸二、中山誠、桐生正幸、足立浩平編著『ウソ発見——犯人と記憶のかけらを探して——』(北大路書房、二〇〇〇年五月)を参照した。

(14) ミシェル・フーコー『異常者たち コレージュ・ド・フランス講義一九七四年——七五年度』(慎改康之訳、筑摩書房、二〇〇二年一〇月)

(15) 「『密会』の安部公房氏」『山形新聞』他の談話記事」(『山形新聞』一九七七年二月一六日。表題は「〈本と私〉／『密会』の安部公房氏／弱者の概念を考える／希望のなさに希望みる」) 斉藤は、前掲論文において「語りが時間の一方方向性の中に留まらず、過去から未来という枠を越えて、新たな物語世界の構造を作り出す様は、立体的な小説の可能性を感じさせる」と指摘している。本論における指摘は、斉藤の指摘する「アレゴリーから超越した純粋な物語」とは趣を異にするものの、小説の中に「立体的」構造を見ようとする点においては共通する視座を有する。

(17) ジル・ドゥルーズ『フーコー』(宇野邦一訳、河出書房新社、二〇〇七年八月)

(18) 「髪」については、宇野邦一『ドゥルーズ 流動の哲学』(講談社、二〇〇一年四月)、小泉義之『ドゥルーズの哲学——生

命・自然・未来のために』（講談社、二〇一五年一〇月）などを参考にした。宇野は、同書において、「襞とは内に畳まれた外である。トポロジックな概念としての襞は、いつでも両義性にかかわらず、無限の分割可能性と同時に、はてしない連続性を示す。襞は、内と外の、魂と身体の、生と死の、秩序とカオスの、形相と質料の、自己と他者の絶対的な連続性と、相対的な分離を示す。どこまでも可塑的な環境において、様々な思考の事件と主体が、さまざまな折り畳みの結果、私（人称）という襞を想起させる」と指摘する。本論は、この指摘に大いに示唆を受けている。

(19) ドゥルーズは前掲書で、「力のあいだの力として人間が自分を組成する力を折り畳むことができるのは、外が自分自身を折り畳み、ある〈それ自身〉を人間のなかに穿つときだけである。すでに、形態がもつれ合い、戦いがすでに始まっているとき、第三の形象としてやってくるのは、まさにこの存在の襞である。そのとき、存在は、もはや「知的存在」(Scient)でも「権力的存在」(Poesct)でもなく「自己的存在」(Se-est)である」とも述べている。『密会』での「死につづける」ことは、ドゥルーズの指摘を参照すれば、外部の力を折り畳むことで褶曲する「自己的存在」の謂いである。

(かわたりよう 本学兼任講師)